

詩集
むらに吹く風

皆木信昭



コールサック社

詩集

むらに吹く風

皆木信昭



コール
サック
社



石炭袋

皆木信昭詩集『むらに吹く風』

2015 年 9 月 5 日初版発行

著 者 皆木信昭

編集・発行者 鈴木比佐雄

発行所 株式会社 コールサック社

〒 173-0004 東京都板橋区板橋 2-63-4-209

電話 03-5944-3258 FAX 03-5944-3238

suzuki@coal-sack.com <http://www.coal-sack.com>

郵便振替 00180-4-741802

印刷管理 (株)コールサック社 製作部

*装幀 杉山静香

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN978-4-86435-220-8 C1092 ￥2000E

詩集

むらに吹く風

目次

一章 長い旅

序詩 むら

6

土道 14

長い旅 20

柚子 26

柿 30

川 36

危ない橋 40

野 44

丘の化石 48

二章 むらに吹く風

山村 56

林業 62

才の谷 66

峠の歴史 70

峠たお 74

むらに吹く風 78

雪 82

空 86

三章 家族

農業 92

畑の跡 96

いね刈 102

略歴	あとがき	ふるさと	正月	盆	家族
126	124	120	116	110	106

詩集

むらに吹く風

目次

一章 長い旅

序詩 むら

土道 14

長い旅 20

柚子 26

柿 30

川 36

危ない橋 40

野 44

丘の化石 48

二章 むらに吹く風

山村 56

林業 62

才の谷 66

峠の歴史 70

峠たお 74

むらに吹く風 78

雪 82

空 86

三章 家族

農業 92

畑の跡 96

いね刈 102

略歴	あとかき	ふるさと	正月	盆	家族
126	124	120	116	110	106

詩集

むらに吹く風

皆木信昭

序詩　むら

いちばん低いところを蛇行して川
川に沿うて細長い田んぼ

山裾を辿るように道

ところどころに橋が架かって

川向うに二軒　こちらに三軒

谷が狭まると道と川だけ

ぐるり曲るとまた視界が広がって

田んぼや民家

どこまでも続く山峡には

さらに小さな谷がいくつもあつて

谷あいには猫の額ひたいほどの田んぼの跡

山の斜面のところどころには畑の跡

目くそか鼻くそほどの小さな田や畑は

だれがいつ頃ひら拓いていつまで耕作したのか

冬は雪が多くてもっぱら山仕事

奥山に入つて炭を焼き

里山の木を伐きつて割木や薪をつくり

裸になつた山のくぼみや平地ひらの

切株を掘り起こし笹根を拾なうて土を均らし

急なところは畑　ゆるいところは田

雪が積もつたら仕事にならず

雪が溶とけるのを待つて出かけて行つて

木の株一つを掘り上げるのに三日も四日も

笹根を拾うのに十日も二十日もかかつて
ひと冬で出来上らなかつたら二た冬三冬かけて

蕎麦そばが一斗穫れてもよろこび

小豆あずきが二斗もあつたと自慢し

いねの小束が五十あつたと背負うて戻り

冬が来るたんびに少しずつ山を拓ひらいていつて

親のあとを子が継ぎ

子のあとを孫が継ぎ

最初は二軒か三軒

分家して四軒となり五軒となり

それがまた分家して次第に戸数がふえて

土居をつくり集落むらをつくり

これ以上は田や畑にする所が無うなり

いねを作り麦を作り豆や芋いもを作り

炭を焼き割木や薪をこしらえて金に換え
蚕かいこを飼えば金になると聞けばどの家も蚕

牛の子が高う売れると聞けば牛

これからはタバコの葉と聞けばタバコ

養蚕場を広げようと棟数をふやし

牛小屋を建て タバコの乾燥庫を造り

そのたんびに借金が増ふえて

他人ひとが八時間働くところを十時間

十時間で足らなければ十二時間十三時間

働くことを生きるよろこびにして

むかし 美作国梶並庄西谷皆木村みなぎ

現在 岡山県勝田郡奈義町皆木

いつ頃から人が住みついたか知る術はないが

文化文政の頃津山松平藩検地帳によると
戸数四十八戸 男百十四人 女八十九人
田十三町八畝二十四歩 畑六町四反四畝
その後少しずつ増えていつて

昭和二十年 戸数 六十一戸
男百二十一人 女百四十三人

田三十一町二反五畝 畑八町一反七畝
平成二十七年の現在

戸数三十四戸 男四十七人 女五十四人
田二十町六反一畝 畑二町一反五畝

専業農家一戸 兼業農家十四戸 非農家十九戸
非農家十九戸のうち無職十五戸

無職十五戸はどれも老人一人または二人暮らし
高齢化率四十八パーセント 空家十二戸